

Exhibit No. 162

115-8-1

極東國際軍事裁判所

米合衆國其他

宣誓書

對

事件

荒木貞夫其他

自分若槻禮次郎ハ自分ノ良心ニ從ヒ以下述べル
コトが眞實デアアルコトヲ誓ヒマス

自分ハ一九三一年（昭和六年）四月カラ同年ノ
十二月迄日本ノ總理大臣デアリマシタ。自分ノ前
任者デアアル濱口内閣ノ作ツタ豫算ヲ實行スルノガ
自分ノ内閣ノ政策デアリマシタ。此ノ豫算ヲ實行
スルコトハ軍ニ制費アラレタ費用ヲ削減スルコト
デアリマシタ。

一九三一年（昭和六年）九月十八日奉天事變が
起キタトキ内閣が始メテ其ヲ知ツタノハ次ノ日九
月十九日ノ曉デアリマシタ。此時自分ノ内閣ノ陸
軍大臣南次郎ハ奉天ニ於テ支那軍ガ日本軍ニ發砲
シ日本軍ハ之ニ應ジタ旨ヲ内閣ニ報告シマシタ。
内閣ハ此事件其本質ニ於テ非常ニ重大ナ情勢ヲ
包蔵スルコトヲ認識シテ其ヲ速ニ解決サセルコト
ヲ前進黨陸軍大臣ニ希望スルコトニ意見ガ一致シ
マシタ。此ニ付南次郎ハ其意ヲ其日
大將ハ職略上ノ理由ニヨリ日本軍ハ一定
距離支ケ支那ノ領域内ニ進フコトガ必要ナルヲ
ト報告シマシタ。又其ハ保護的ナ手段デ、如何ナ

ル意味ニ於テモ續大サレルコトヘナイダラウト通
ベマシタ。其翌日更ニ閣議ガ兩カレ南大將ヘ更ニ
(・) 渡江ガ一續大サレタガ此レ以上ノ續大ヘナイダ
ラウト報ジマシタ。同様ナコトガ三十二日マデ繰
返ヘサレマシタ。

九月二十二日夜朝鮮軍司令長官林大將ハ其軍隊
ヲ烏綠江ヲ渡ツテ行動サセ終ニ清洲ニ侵入シマシ
タ。此事實ハ翌日ナル九月二十三日前通南大將ニ
報告サレマシタ。

林大將ハ天皇陛下ノ裁可モナク内閣、陸軍大臣、
參謀總長ノ許可モナク唯清洲派遣軍カラ急進シタ
救援ノ要求ヲ受ケ又自身モ其職務上御断行シテ
モ差支ヘナイ急進シタ情勢ト考ヘ行動シタコトハ
事實デアルト南大將ハ閣議ニ於テ告ゲマシタ。

此時ニ際シテ清洲ニ於ケル此等ノ行動ハ速刻止
ムヘキデアルト云フコトニ閣僚ノ意見ハ一致シマ
シタ。陸軍大臣南大將モ内閣ノ此政策ヲ直ニ陸軍
ニ實行サセルコトニ同意シマシタ。然シ乍ラ續大
ハ日ヲ進テ續ケラレ總理大臣タル自分ハ陸軍大臣
南大將ト幾度カ會議シマシタ。自分ハ毎日地圖ヲ
示サレマシタ。ソシテ南大將ハ清洲ニ於ケル日本
軍ガ今後越エナイ管ノ境界線ヲ示スノガ常デアリ
マシタ。ソシテ殆ド日毎ニ此境界線ハ無視サレ更
ニ續大サレタコトガ報ゼラレマシタ。然シ何時モ

此ガ最后ノ行動デアルトノ保證ガ付イテ居リマシタ。

當時ノ陸軍次官ハ杉山元中將、陸軍參謀總長ハ金谷半造大將、陸軍參謀次長ハ二宮治重大將デ又軍務局長ハ小磯國昭大將デアリマシタ。

私ハ此ノ事態ヲ制禦シヨウト努メ、考ヘ及ブ限リノアラユルコトヲ試ミマシタガ成功シマセシタ。私ノ最后ノ處置ハ政友會トノ聯立内閣ヲ造ラウト試ミタコトデ、此ノ民政黨ト政友會トノ結合シタ力ニ依ツテ滿洲ニ於ケル陸軍ヲ統制シ得ルコトニ望ミヲカケタノデスガ、多クノ困難ガ新カル聯立ヲ喜バナカツタタメ此ノ方法モ失敗ニ歸シタノデアリマス。

當時ノ情勢ハ新カル次第デアリマシタシ私ノ内閣ノ政策ニハ滿洲問題ニ關シテハ決シテ變更ヘアリマセシタ。私ノ内閣ハ一致シテ陸軍ニ依ル如何ナル膨脹ニモ反對シ續ケ、又日々滿洲ニ於ケル侵略的行動ヲ停止スベク不斷ノ努力ヲ拂ツテキタノデアリマス。ソノ上ニ右記南陸軍大臣ハ滿洲ノ陸軍ノ統制ニ失敗シテ居リ此ノ問題ニ就テノ内閣ノ一致セル政策ヲ遂行シテキナカツタノデソノタメニ私ハ首相ノ地位ヲ辭シ又私ノ内閣モ共ニ辭

11558-4

取シタノデアリマス。

若 槻 禮 次 郎

上記若槻禮次郎へ一九四六年（昭和二十一年）六月十八日陸軍省ビル内ニテ本官ノ面前ニテ宣誓ノ上本供通書ニ署名せり。

法務局、大尉、アーサー・エイ・サンドウスキー

證 明 書

予マコト・エム・キムラ　ハ茲ニ左ノ如ク證明
 ス。予ハ日英兩國語ニ通曉シ且本日前記供述書ヲ
 上記若槻龍次郎ニ日本語ニテ讀ミ聞カセタリ。之
 ヲ爲スニ當リ予ハ前記供述書ノ内容ヲ英語ヨリ日
 本語ニ忠實且ツ正確ニ翻譯セリ。右若槻龍次郎ハ
 該供述書ノ内容ガ眞實ナル旨並ニ該供述書ニ宣誓
 ノ上快ク署名スル旨述べタリ。右ハ予ノ面前ニテ
 正式ニ宣誓シ且ツ供述書ニ予ノ面前ニテ宣誓ノ上
 署名セリ。

該宣誓ヲ爲シ且ツ該供述書ニ署名スルニ就テノ凡
 テノ手續ハ日本語ヨリ英語ニ、又英語ヨリ日本語
 ニ忠實且正確ニ翻譯セラレ、右供述者ニヨリ充分
 理解且了解セラレタリ。

一九四六年（昭和二十一年）六月十八日

日本國東京ニ於テ

軍曹　マコト・エム・キムラ